

# 復興へ長い道のり実感

東日本大震災の発生から11日で4年半を迎える。岡山経済同友会は国際医療ボランティアAMDA(岡山市)の仲介により、今夏も8月22、24日に県内の大学生らによる復興支援ボランティアを岩手県大槌町へ派遣した。同ボランティアは5回目の今回でいったん終了となる。この間、町は何が変わり、何が変わっていないのか。同行取材で見た現地の「今」を報告する。(水野雅文)

津波の爪痕を見た。町を走っていた道路の一部だろうか。アスファルトの塊が至る所に埋まっている。廃家電、食器、さびた車のナンバープレート…。平穏な生活が一瞬で流し去られたことがうかがえた。

「ここに町があったなんて信じられない。以前の風景を思うと復興はまだ遠い」。大槌町中心部を一望できる城山公園。就実大2年の大岩賢一郎さん(20)は眼下の風景に言葉を失った。

## 生存者の使命感

がれきは片付いているものの、一面ほぼ更地の状態。新たな町の土台を造るため、土地のかさ上げ工事が進められている。

現地入り2日目の23日、同町吉里吉里地区の海岸清掃では打ち寄せたごみの中を子を見た。

川崎医療福祉大1年の中本千晴さん(18)は「建設業の人手不足で復興が鈍っていると聞く。発生から4年以上たっても、震災の跡はこんなに残っているのにとつぶやいた。



城山公園から見下ろした大槌町中心部。今なお更地が広がる



カキの水揚げ作業を手伝う学生ボランティア。被災者の言葉に復興への力を感じた

## 海岸清掃や水揚げ作業 被災者の力強さも

「あちこちの倒壊した家屋のそばで助けを求める声が聞こえた。私たちの経験を無駄にしないで、普段から災害の際に生き延びる方法を考えてほしい」

環太平洋大3年の越智亜斗夢さん(20)は「組合の人の『立ち止まってはいけない』という言葉が印象的だった。少しずつでも確実に復興は進んでいくと感じた」と話した。

## 確実に進む

被災者の力強さも垣間見ることができた。22日に訪れた同町安渡地区の漁港。震災で船や作業小屋は壊滅的な被害を受け、新おおつち漁協は組合員が約860人から300人に激減したが、懸命に立ち上がった。

もなる。学んだことを岡山で広めるのもボランティアの役目」。被災地を心に焼き付け、震災を忘れないことが何より大切なのだと気付かされた。

▽…「家族や友人と災害が起きたときの行動を話し合おう」「風化を防ぐため、被災地の情報を発信する活動はできないか」。帰りのバスの中、意見を交わす学生たちを心強く感じた。5回に及んだ同友会のボランティア派遣は一区切りとなるが、被災地への思いはつないでいきたい。(水野雅文)

## 被災地への思いつなぐ

▽…4年半を経た被災地を見て、学生ボランティアたちは多くのことを感じ取ったことだろう。自分たちに何ができるか、悩みが深まったかもしれない。岡山大4年の金城奈々恵さん(23)は「被災地とどう向き合うべきか考えたい」と話していたが、答えは見つかっただろうか。

▼…一つのヒントを与えてくれたのは、被災体験を話してくれた渡辺さんだった。「私たちが重ねた失敗や苦労は、皆さんの見本に

## 取材メモ

養殖カキやホタテの水揚げ作業を手伝った学生25人は、殻に付着した貝や海藻を取り除き、重さによって分別した。作業に慣れるにつれ、組合員とも打ち解けた。

も検討するという。

これまで全てに同行した黒住宗道団長(岡山経済同友会教育問題副委員長)は「学生たちが被災地でできることはわずかだったが、得られた学びや刺激は大きかった。災害があれば、経験を生かして周囲を導いてくれるだろう」と期待した。